

毛皮のエロス

2007(平成19)年6月12日鑑賞<テアトル梅田>

★★★★



監督＝スティーヴン・シャインバーグ／出演＝ニコール・キッドマン／ロバート・ダウニー Jr.／タイ・バーレル／ハリス・ユーリン／ジェーン・アレクサンダー（ギャガ・コミュニケーションズ配給／2006年アメリカ映画／122分）

……女流写真家ダイアン・アーバスを有名にしたのは、結合双生児、同性愛者そしてヌードリストたちという「フリークス」を被写体とした写真だが、それは一体なぜ……？ 40歳となった熟女(?)ニコール・キッドマンと『セクレタリー』(02年)の奇才シャインバーグ監督のコラボで描かれるのは、そんな写真家誕生に至った、ちょっと怪しげな雰囲気の話……。顔と頭が、ライオンのような男に彼女はなぜ魅かれたのか？ そんなフリークスの本性は、ひょっとしてあなたの中にも……？

40歳のニコール・キッドマンは……？

あのニコール・キッドマンの主演、そしてそのタイトルが『毛皮のエロス』となれば、そりゃ私の関心を引かずにはいられない作品……？

ニコール・キッドマンは、2006年に発表されたハリウッド女優のギャラ・ランキングでは依然最高額の1700万ドルでトップを維持しているとのこと。しかし、夫であったトム・クルーズと共演して、美しいヌード姿を披露した『アイズ ワイド シャット』(99年)から既に8年。今や彼女も40歳だ。『めぐりあう時間たち』で念願のアカデミー賞主演女優賞を受賞したのは2002年だったが、この映画でも彼女の美女ぶりはあえて封印されていた(?)が、『毛皮のエロス』でも、チラシで見るとやはりかつての美しさは少し衰えている感じ……？ さて、現実にはスクリーン上で観る40歳のニコール・キッドマンは……？

スティーヴン・シャインバーグ監督って、ホントに奇才！

この映画のチラシにみる謳い文句は、「アカデミー女優ニコール・キッドマン×『セクレタリー』の奇才スティーヴン・シャインバーグが挑む、偏愛のエロス」……。シャインバーグ監督の2作目である『セクレタリー』（02年）は、43歳の独身弁護士とその「秘書」の仕事に就いた自傷癖のある内気な女の子が織りなす何とも奇妙な「主従関係」と「愛情」を描いた映画で、私が「あらゆる意味において、個人経営をしているすべての法律事務所の『男性』弁護士に超オススメしたい」と書いた異色作（『シネマルーム3』254頁参照）。

したがって、彼を「奇才」と呼ぶことに私は大賛成だから、彼がニコール・キッドマンと共に挑む「偏愛エロス」とはどんなものか興味津々……？

ニコール・キッドマン扮するダイアン・アーバスは実在した有名な女性写真家だが、映画の冒頭わざわざ「本作は史実に忠実な伝記映画ではない」とクレジットされるように、この映画はあくまでシャインバーグ監督の視点でダイアンのひとつの断面を切り取ったもの。

映画の冒頭、まずあなたは度肝を抜かれるに違いない。ニコール・キッドマン扮するダイアンが首からカメラをぶら下げて訪れたのは、何とヌーディスト村！ 冒頭のクレジットが消えると、全裸の男がヌーディスト村に入るダイアンをお出迎え。そして、迎え入れた応接室の中で、その妻と思われる女性と素っ裸で並んでソファに座る2人に対して、写真撮影の許可を申し出るダイアンだったが、男は「OKです。ただしあなたも裸になることが条件です」ときたから、さらにビックリ。さて、「少し考える時間を下さい」と答えたダイアンは、どんな決断を……？

まずここから、『セクレタリー』を上回るシャインバーグ監督の奇才ぶりが発揮されそうな偏愛エロスの予感が……。

夫はファッション・フォトグラファー

実在のダイアンが生きたのは1923年から1971年のこと。そして、夫と離婚したのが1969年で、1971年7月の死亡は、大量のバルビツル酸塩を飲み、自ら手首を切って自殺したもの。それを前提として、この映画の時代と舞台は、1958年のニューヨーク。

夫アラン（タイ・バーレル）はコマーシャルやファッションを中心とした写真家で、ダイアンはその助手として働いていた。ここまでは事実に忠実な設定らしいが、ダイアンの父親デヴィッド・ネメロフ（ハリス・ユーリン）が、ニューヨーク5番街の高級毛皮店兼デパート、ラセックスのオーナーというのは事実ではないらしい。



© MMVI NEW LINE CINEMA PICTUREHOUSE HOLDINGS, INC. / HBO PICTUREHOUSE HOLDINGS, INC. ALL RIGHTS RESERVED.

それはともかく、冒頭のヌーディスト村でのショッキングなシーンが印象的に提示された後、スクリーン上は本筋であるニューヨークのアーバス・ファミリー写真スタジオで毎年開催される、ラセックスの最新毛皮ショーの華やかなシーンに。ダイアンは夫の助手として、またモデルたちのスタイリストとして懸命に内助の功を發揮しているが、このショーはどちらかというと父親デヴィッドと母親ガートルード（ジェーン・アレクサンダー）の晴れの舞台上、ダイアンの夫アランはそれを渋々手伝わされているような感じ……？ アランがそれにどこまで反発しているのかはわからないが、ダイアンは実は内心ウンザリしていることはミエミエ……。そんな、どこか居心地の悪い気持ちを抱いていたダイアンが、ふと窓から外を眺めた時、その目にとまったのは……？

🎬 『エレファント・マン』 以来の衝撃

最初に『エレファント・マン』（80年）を観た時はその不気味さにビックリしたが、窓からダイアンが見た男ライオネル（ロバート・ダウニー Jr.）の風体にもビックリ。帽子を被り、コートを羽織り、マフラーを巻いたファッションは普通だが、異様なのは顔の部分。つまり、その顔はマスクとマフラーですっぽりと覆われ、2つの目だけが光っているという異様なもの。こりゃ一体ナニ……？

どうも彼は今日隣り（上階？）に引っ越してきた男のようだが、なぜかマスクの中から覗く2つの目にダイアンは惹きつけられることに……。

ニコール・キッドマンが女優として最高額のギャラをもらっている所以は、目の演技力。その目の力による強烈なアピール力と表現力がこの映画全編を通じての特徴だが、その1発目がこの「ご対面」のシーン。ライオネルはいつかこのマスクを脱ぐことになるのだろうか、さてその下は一体どんな素顔……？ 興味津々となり、思わず身を乗り出していくことまちがいなし……？

家の構造はどうなっているの……？

この映画は1958年のニューヨークが舞台だし、アーバス家の家も、引っ越して来たライオネルの家もかなり広いから、日本でいうアパートかマンションのイメージとは全然違うもの。しかし、それぞれ戸建てではなく、入口は共同であり、アーバス家の上階にライオネルが住んでいることはたしか。

さらに、アーバス家の天井のある部分には、上下の階に通じる折り畳み式の階段まであったから驚き。ストーリーの展開にはあまり関係ない（とはいえ、秘かに（？）上下の階を行き来する関係も変なものだが……？）が、都市問題をライフワークとしている私にはこれも興味津々……？

フリークスとは……？

ダイアンは写真家である夫の助手をしていたが、自分も写真を撮りたいという欲求はもっていたはず。ただ、「何を撮りたいか」が自分でもわかっていなかったため、その欲求が潜在的なものとして留まっていただけ。ところが、ライオネルを見た瞬間、ダイアンの心に湧いたのが、「あなたを撮りたい」という気持。さて、それは一体なぜ……？

珍しいもの、恐いもの見たさの好奇心……？ それとも、上品でブルジョア的な生活の中では得られない、異質なもののマイナーなものに対する執着心……？

ところで、あなたは「フリークス」という言葉を知ってる？ これはネット情報によれば、「英語 (freaks) で、奇人などの意味を持つ単語。熱中する、中毒者の意味合いも持つ。江戸川乱歩作中に頻繁に出てくる。日本ではマニアやオタクとほぼ同義で使われている」とのこと。しかして、ダイアンがライオネルの異様な姿を見て「あなたを撮りたい」と願ったのは、写真家ダイアンがフリークスだったため……？

それまでは自分自身でも全く意識していなかったフリークスとしての本性が、ライ

オネルの姿を見たことによって初めて顕在化してきたわけだ。

シャインバーグ監督がこの映画を撮ろうと思ったのは彼を凍りつかせた一枚の写真を見た時から。それはユダヤ人の大男の写真で、体重が495ポンド（約225kg）、身長8フィート（約240cm）のエディ・カーメルと彼の両親を写した、ダイアンの代表作だったとのこと。

そう、20世紀中盤の時代を生きた女性写真家ダイアンの被写体となったのは、結合双生児、同性愛者、そして、ヌーディスト等フリークスの人々だった。そして、そんなダイアンの写真が多くの写真家たちに多大な影響を与え、1967年には彼女の作品がニューヨーク近代美術館に出展されるまでに至ったというわけだ。

隣（上階？）へ引っ越してきたライオネルを一目見た時から、自分がフリークスであることを自覚させられたダイアンの、その後の行動は……？

これは、なぜ？ あれは、なぜ？

この映画は奇才シャインバーグが監督しただけにスリリングな切り口がいっぱい。最初に驚いたのは、子供たちから排水パイプが詰まっていると指摘され、ダイアンが自らその修理をするシーン。そこでは何と上の階が流したと思われる大量の毛髪が発見されることに。さらに驚いたのは、やっと水が流れるようになった途端、何とキーが1個ボタンと落ちていたこと。このキーは一体何……？

また、ダイアンがカメラを首に懸けて1人階段を上り、派手な装飾が施されたドアの前まで行ったのは、「あなたを撮りたい」と言うためだったが、それを予測していたかのようにライオネルがドアを内側から開けたのは一体なぜ……？ またマスクを取ったライオネルの顔と頭部はライオンのような毛に覆われていたが、これは一体なぜ……？

さらにその後、ダイアンが毎夜のようにライオネルの部屋に忍んで行ったのは一体なぜ……？ ダイアンはライオネルの部屋の中で一体何をしていたのだろうか……？ このように、この映画を観ていると、これはなぜ？ あれはなぜ？ の疑問がいっぱい湧いてくるはず……。さて、その答えは……？

フリークスな人々たち

最近では映像技術と共に特殊メイクの技術も進歩がすごいから、スーツ姿のライオネ

ルの顔と頭部だけがライオンのような毛に覆われている姿も実にサマになっている。

ライオネルの説明によると、これは「多毛症」によるものだが、そんな「フリークス」になってしまったライオネルは今、一体どんな生活をしているのだろうか……？ またダイアンとライオネルの仲が親密(?)になるにつれて、ダイアンはフリークスの世界に興味と関心を深めていったらしく、ライオネルから紹介された手が使えないため足でコーヒーを飲むおばさんやサーカスでよく見るような子供の身長しかない大人たち、逆に巨人症の男などと次々と友達に……。その挙げ句、ダイアンはこれらの友人たちを一挙に自分の家に「招待」したから、夫のアランや子供たちはビックリ！

なぜダイアンがこんなフリークスな人々に惹かれていったのかを考えながら、普通の映画ではめったに観ることの出来ない不思議なフリークスな人たちのシーンの数々をたっぷり……。

肺病患者のセックスは……？

この映画の見どころは、出会いの最初から濃厚に感じられるライオネルとダイアンの妖しげな雰囲気……？ ダイアンは夫と子供のある身だから、いくら何でもすんなりライオネルと「いい仲」になってしまうことはないと思うのだが、随所にそうなってもおかしくないナと思わせるシーンが……。

他方、時々大きく咳き込んでいたから、ライオネルは何かの病気かと思っていると、案の定重度の肺病で、最近呼吸困難になることもあるらしい……。 そんなライオネルがダイアンに対して依頼したのは、全身の毛を剃ってもらい正常な男の姿(?)にしてもらうこと。スクリーン上で見るそんな全身毛剃りのシーンは、見方によってはかなりエロティックなもので、その後の2人の成り行きを十分連想させるもの……？

しかして、はじめて普通の男の姿となったライオネルはダイアンとめでたくベッドインするわけだが、私が疑問に思うのは、これほど重度の肺病の男がセックスすることが可能なのか、ということ。私の親しかったある友人が重度の肺病だったからよく聞いていたのだが、歩くことすらしんどい人間が激しいセックス行為に及べば、それだけで大往生してしまうのでは……？

離婚原因は……？ 有責配偶者は……？

ダイアンは現実には1969年に夫のアランと離婚しているが、この映画を見ていると、「僕は普通の男だ……」と愛する妻に対して懸命にアピールするアランの姿が少しかわいそう……？

だってアランは、ダイアンに対して何も悪いことはしておらず、良き夫であり良き父……。そして、夫婦間の危機を招いたのは、一方的にダイアンがフリークス（なもの）に対して惹かれるという特異な本質をもっていたため……？

するとアランとダイアン夫婦の離婚原因は一方的にダイアンの側にあり、ダイアンが有責配偶者ということになるから、いかに女性の権利が強いアメリカでも、離婚に際してはアランからダイアンに対して慰謝料が支払われるはずはなく、本来ダイアンがアランに対して支払わなくてはならないはず……。

それはともかく、ダイアンにとっては、写真家としての自分の生き方を発見できたという意味でライオネルとの出会いは自己発見の契機となる運命的なものだったわけだが、他方それはアランにとっては迷惑千万なもの……？

ラストは再びヌードリスト村に

映画の冒頭、「写真撮影はOKだが、それはあなたもヌードになることが条件だ」と言われ、「少し考える時間を下さい」と答えたダイアンだったが、よく考えてみれば（？）その答えは未だ聞けないまま……。そんな中途半端な状態で映画を終わらせるのは申し訳ないと思った（？）奇才シャインバーグ監督は、きっちりと最後にその答えを示しているから、ご注目！

しかして、舞台は再びあのヌードリスト村に……。ヌードリスト村では何人かの人がヌード姿で散歩したり、談笑をしたりと、思い思いに自由を満喫している様子。そんな中、ベンチに座っているヌード姿の女性に近づいてきたのがカメラを首にぶら下げた、オールヌード姿のニコール・キッドマン、いやダイアン。

さあ、どこまでそのヌード姿を拝ませてもらえるのか、それが大きな問題だが、ニコール・キッドマン・ファンは、このシーンだけでもこの映画は必見かも……？

2007(平成19)年6月14日記